

【旧約聖書日課】エレミヤ書 31章27～34節

²⁷見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に、人の種と動物の種を蒔く日が来る、と主は言われる。²⁸かつて、彼らを抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらそうと見張っていたが、今、わたしは彼らを建て、また植えようと思張っている、と主は言われる。

²⁹その日には、人々はもはや言わない。

「先祖が酸いぶどうを食べれば、子孫の歯が浮く」と。

³⁰人は自分の罪のゆえに死ぬ。だれでも酸いぶどうを食べれば、自分の歯が浮く。

³¹見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。³²この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。³³しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。³⁴そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 2章10～18節

¹⁰というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。¹¹事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、

¹²「わたしは、あなたの名を

わたしの兄弟たちに知らせ、
集会の中であなたを賛美します」

と言い、¹³また、

「わたしは神に信頼します」

と言い、更にまた、

「ここに、わたしと、
神がわたしに与えてくださった子らがいます」

と言われます。¹⁴ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様

に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、¹⁵死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。¹⁶確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。¹⁷それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。¹⁸事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。

【福音書日課】 マルコによる福音書 1章12～15節

¹²それから、「霊」はイエスを荒野に送り出した。¹³イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

¹⁴ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、¹⁵「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

四十日【こども説教のために】

教会は、先週水曜日の「灰の水曜日」から、「受難節（レント）」が始まりました。四十日と六回の日曜日を、特別な祈りの期節として歩みます。主イエスは、「神の国の福音」を宣べ伝えるお働きを始められる前に四十日間、荒野にとどまられました。わたしたちも、四十日間荒野にとどまられた主イエスと共にいささせていただきますのです。

主イエスが荒野に行かれたのは、「霊」に送り出されたからでした。ご自分でこうしようと決めてなさったものではありません。主イエスは、ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられたとき、水の中から上がられたご自身の上に、天から「霊」が鳩のように降って来るのをご覧になられていました。その「霊」によって、荒野に行くように促されたのです。

わたしたちを、荒野にとどまられる主イエスと共にいるようにして下さるのも、神が天からお送りくださる「霊」なのです。日曜日の朝、わたしたちに目覚めをお与えくださり、それぞれの家から教会へと導き出してください。わたしたちを誘惑するサタンが何者であるのか、どのような誘惑があるのか、共にいてくださる主イエスが、わたしたちにお教えくださるのです。

主イエスは、荒野でサタンから誘惑をお受けになられました。どのような誘惑だったのでしょうか。「神の子」と呼ばれるお方でも受けなければならない誘惑があったのでしょうか。主イエスは、わたしたちが受けるのと同じような誘惑をお受けになられたのです。試練をお受けになられたのです。わたしたちが主イエスと共にいることができるように、お受けくださったのです。わたしたちを誘惑するサタンが何者であるのか、どのような誘惑があるのか、共にいてくださる主イエスが、わたしたちにお教えくださるのです。

「それから」の荒れ野

「受難節」の最初の日、「灰の水曜日」の夕べの「灰の祈り」をもって、今年の受難節の祈りの歩みを始めました。受難節は、悔い改めと克己の祈りを深めるときとされてきました。その手助けとして、今でもこの期節に断食を心がける習慣を続けている方々もあります。断食といっても、まったく食事を摂らない絶食をするわけではありません。食卓から肉類を断ったり、間食や嗜好品を断つなどするのです。少しばかりの我慢が求められるような小さな断食を重ねながら、自らを省みる悔い改めを深め、自分の弱さを見つめて、新たにされることを願う祈りに向かわせていただくのです。また、その断食の実践で浮いた財があるならば、これを克己献金として取って置き、愛の施しとして必要なところに献げることもできるでしょう。主イエスが山上の説教でお教えになられた三つの実践、施しと祈りと断食を、キリスト者の先達は、受難節のときにこそ集中して取り組んできました。受難節は、キリスト者がキリスト者らしくなるとき、と言えるかもしれません。

受難節の四十日の先には、主のご復活を祝う「復活祭（イースター）」が控えています。その五十日後には、「聖霊降臨祭（ペンテコステ）」を祝うときが続きます。教会は、これらの祝いのときに新しくキリスト者が起こされるように、受難節を、洗礼志願者の備えのときともしてきました。教会によっては、受難節の最初の主日に、志願者の志願式を執り行います。わたしたちの教会に洗礼志願式の習慣はありませんが、受け継いでいる思いは同じです。受難節を迎えたこのときに、わたしたちの教会の群れの中からも新しくキリスト者として生きることを願う者が与えられ、洗礼の志願を申し出る方が現れてくださることを、願っています

主イエスは、荒れ野に赴かれる前に、洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられていました。福音書は、主イエスが荒れ野に行かれたのは「それから」だと伝えています。洗礼をお受けになられてから、主イエスは、荒れ野に行かれ、四十日間とどまり、サタンの誘惑をお受けになられたのです。その道筋は、「霊」によって導かれたものです。洗礼の水の中から上がられたときに主イエスをご覧になられたという「天から降る霊」が、主イエスを荒れ野へと行かせられたのです。それは、洗礼から始まったのです。洗礼を受け、「神の子」と宣言を受けるところから始まったのです。

「荒れ野の四十日」は、わたしたちを、洗礼から始まる歩みへと呼び戻すのです。すでに洗礼を受けた者も、まだ受けていない者も、この期節の祈りの営みへと加えられているのは、「霊」の導きによることです。その導きを、わたしたちは、洗礼の恵みのうちに知らされてきました。洗礼によって、「霊」の導きを見る「主イエスの教会」に固く結ばれてきたのです。

「野獣」と一緒に

主イエスは、このときに限らず、弟子たちを従わせられるようになられてからも、時折、「荒れ野」に出て行かれることがあったようです。わたしたちの『聖書』が「人里離れたところ」と訳しているのが、「荒れ野」と同じところ。主イエスは、祈るためにそこに行かれることがあったのです（マルコ 1:35）。あるいは、忙しく働く弟子たちを休ませるために「人里離れたところ」に行かせられたこともありました（同 6:31 以下）。

わたしたちは、ときに日常生活から離れる必要があります。日々の生活に忙殺されているならば、なおさら、そこから一時離れて、静まり、心休ませ、祈るときを持たなければなりません。日常生活を送る場所にとどまっていたのでは、回復できないものがあるのです。

それは、一見すると無駄なものに見えるものかもしれません。経済的な価値が無いように思われるところかもしれません。時間を浪費するだけで、手もとに戻ってくるものが何もないように思われることかもしれません。それでも、そこに行く必要があるのではないのでしょうか。主イエスが「荒れ野」で四十日を過ごされ、また折々に「人里離れたところ」に行って祈られたように。弟子たちを「人里離れたところ」で休ませようとされたように。

そこで、主イエスは、何か特別なことを成し遂げられたわけではありません。ただ、祈って過ごされたのです。弟子たちが休息を取ることができるように願われたのです。自分の手を動かすことではなく、手を休め、手の中に握りしめていたものを明け渡し、自分の時間を明け渡して、そこにとどまることを、主イエスはそこで願われました。

もちろん、思い通りに行かないこともあります。せっかく家を離れ、仕事を離れ、静かに祈るために出て来た「荒れ野」でも、わたしたちは、自分の手を動かし、頭を働かせ、心を騒がせ続けてしまうかもしれません。自分が後生大切にしてきたものを手放すことができず、ますます強く握りしめてしまうかもしれません。「荒れ野」に出てきたのに、自分を明け渡すことができないことがあるのです。主イエスは、そのことをご存じでいらしたでしょう。それが「サタンから誘惑を受けられ」ることであったと、ご存じでいらしたでしょう。弟子たちも、休むために送り出された「人里離れたところ」で、共にいた人々の世話に忙殺され、試みを受けたのです（6:32 以下）。

わたしたちも、「荒れ野」に送り出されてきました。「霊」によって「教会」に送り出されてきました。ここで、主イエスと共にいるためです。「荒れ野」で「野獣」と共にいらしたという主イエスは、わたしたちがたとえ「野獣」であっても、共にいてくださるでしょう。教会の天使たちが、サタンの誘惑から離れさせる道を、主イエスと共に行く助けを与えてくれるのです。